

平成 27 年 9 月 14 日

平成 27 年度 全国学力・学習状況調査の結果について

新発田市教育委員会

1 平均正答率

	小 学 校					中 学 校				
	国語A	国語B	算数A	算数B	理科	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
新 発 田 市	74.3	70.5	78.9	46.1	62.8	76.0	65.6	62.3	40.6	50.0
新 潟 県	73.2	67.2	77.4	44.9	63.1	76.0	66.0	64.4	42.2	52.1
全 国	70.0	65.4	75.2	45.0	60.8	75.8	65.8	64.4	41.6	53.0
県平均との差	+1.1	+3.3	+1.5	+1.2	-0.3	0.0	-0.4	-2.1	-1.6	-2.1
全国平均との差	+4.3	+5.1	+3.7	+1.1	+2.0	+0.2	-0.2	-2.1	-1.0	-3.0

(1) 小学校の特徴

- ① 教科に関する調査の全てにおいて、新発田市の平均正答率は全国平均を上回っている。
- ② 国語A・B、算数A・Bにおいて、新発田市の平均正答率は県平均を上回っている。
- ③ 全体的に、県の平均正答率は全国平均よりも高く、新発田市の平均正答率は県平均よりも高い傾向にある。
- ④ 国語A・Bでは、昨年度よりも更に大きく県平均を上回った。算数A・Bでは昨年度よりも県平均の上回り方がわずかに小さくなっている。
- ⑤ 理科については、全国平均は上回ったが、県平均をわずかに下回った。しかし、県平均との差は、前回（平成 24 年度）より小さくなっている。

(2) 中学校の特徴

- ① 国語A・Bにおいて、新発田市の平均正答率は全国及び県平均と同等である。
- ② 数学A・B、理科において、新発田市の平均正答率は全国及び県平均をやや下回っている。
- ③ 全体的に、県の平均正答率は全国平均とほぼ同等であり、新発田市の平均正答率は県平均よりも若干低い傾向にある。
- ④ 昨年度と比較すると、数学Aを除いて、県平均・全国平均との差が小さくなっており、好ましい傾向が見られる。

2 考 察

(1) 学校別平均正答率

- ① 小学校では教科に関する調査の平均正答率の合計で、7割の学校が全国平均以上または同等であった。全国平均を10ポイント以上上回った学校が半数あったが、10ポイント以上下回った学校も数校あった。
- ② 中学校では教科に関する調査の平均正答率の合計で、半数の学校が全国以上または同等

であった。全国平均を 10 ポイント以上上回る学校、下回る学校がそれぞれ数校ずつあった。

- ③ 学校規模の違いがあるため、単純に比較はできないが、学校間においてかなりの格差が見られる。しかし、昨年度と比較すると、小学校・中学校ともに全国平均を大きく上回る学校が増え、大きく下回る学校は減っている。特に、中学校では、全国平均差の分布が、昨年度は+5～-40 であったが、今年度は+33～-20 であった。

(2) 各設問に見られる傾向

	小学校					中学校				
	国語A	国語B	算数A	算数B	理科	国語A	国語B	数学A	数学B	理科
総設問数	14	9	16	13	24	33	9	36	15	25
全国平均と同等又は上回った設問数	13	9	16	12	24	26	7	18	8	9

① 小学校の傾向

ア 全国平均を下回った設問が国語A、算数Bでそれぞれ1問ずつあったが、それ以外の設問は全て全国平均と同等、またはそれを上回った。

イ 全国平均を下回った設問のうち、全国との差が最も大きかったのは、国語Aでは「話の内容に対する聞き方を工夫する問題」の-3.9ポイント、算数Bでは「比較量と割合から基準量を求める問題」の-3.2ポイントであった。

② 中学校の傾向

ア 全国平均と同等、またはそれを上回った設問数の割合は、国語A・Bで約8割であったが、数学A・Bでは約5割、理科では4割に満たなかった。

イ 全国平均を5ポイント以上下回った設問は、国語A・B、数学Bではなかったが、数学Aで7問、理科で5問あった。

ウ 数学Aで特に全国平均との差が大きかったのは、「反比例のグラフの特徴を問う問題」の-11.0ポイント、「時間と道のりの関係を表すグラフの意味を問う問題」の-9.4ポイント、「平行四辺形となるための根拠を問う問題」の-7.5ポイント、「多数回試行する際の確率を問う問題」の-7.1ポイントなどであった。

エ 理科で特に全国平均との差が大きかったのは、「脊椎のある動物の名称を問う問題」の-7.0ポイント、「気圧の変化で袋が膨らむこととモデル実験との関連を問う問題」の-5.9ポイントなどであった。

(3) 家庭学習との関連

① 小学校・中学校ともに、1日当たりの家庭学習の時間が長い児童生徒ほど平均正答率が高くなる傾向が見られた。

② 平日の家庭学習の時間が1時間未満の児童生徒の割合は、小学校で30%（昨年度比+6%）、中学校では44%（昨年度比-5%）であった。その内、30分未満と全くしないを合計した児童生徒の割合は、小学校では4.5%だったが、中学校では19%も占めた。

- ③ 家庭学習の時間を確保するとともに、授業内容との関連を図るなど、児童生徒が意欲をもって主体的に取り組めるよう指導を工夫する必要がある。

(4) テレビ・テレビゲーム等との関連

- ① 小学校・中学校ともに、テレビゲームや携帯電話、スマートフォンの利用時間が長い児童生徒ほど平均正答率が低くなる傾向が見られた。
- ② テレビの視聴時間と平均正答率について、小学校では顕著な相関関係は見られなかったが、中学校では一定の相関関係が見られた。
- ③ 学校と家庭が連携し、メディアコントロールの取組を引き続き行っていく必要がある。

3 成果と課題

(1) 小学校について

- ① 全般的に良好な結果である。特に、国語について伸びが見られる。新発田市学習指導改善委員会の提言等を受け、各学校で授業改善に取り組んできた成果であると考えられる。
- ② 算数Bで全国平均を下回る設問が複数あり、活用力に課題が見られる。日常生活の事象を算数の学習内容を用いて考察する学習を取り入れるなど、活用力を育てる授業の充実が一層必要である。
- ③ 理科では、前回よりも差は小さくなったものの、教科に関する全調査の中で唯一県平均を下回った。主として「知識」に関する問題で、県平均を下回った設問が多かった。このことから、観察、実験を中心とした学習により得られた理解について、知識・技能として確実に習得させる手立てが必要である。

(2) 中学校について

- ① 授業の目標の明示と最後の振り返りを位置付けるなどして、生徒一人一人に確かな学びが実感できる授業づくりに取り組んできた。国語が全国平均とほぼ同等になるまで向上したのは大きな成果である。
- ② 数学Aで全国平均との差がやや大きくなったことや、数学A・Bともに全国平均を下回る設問が多くあるなど、数学に課題が多い。「教え、考えさせる授業」等により基礎・基本の確実な定着を図るとともに、「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」が実感できる授業づくりを一層進める必要がある。
- ③ 理科では、前回よりも差は小さくなったものの、教科に関する全調査の中で全国平均との差が最も大きかった。全国平均を下回った設問数も最も多い。「知識」と「活用」を一体的に問う問題が多く出題されており、こうした問題への対応が課題である。このことから、観察・実験など、科学的に探究する学習活動を充実させることや、日常生活との関連図り、理科を学ぶ意義や有用性を実感できるような指導の工夫が必要である。